

「介護過誤」を考える

ケアワークラボやまもと 山本 かの子

医療過誤について当事者の方々からお話を聞かせていただき、感銘を受けた。

中でも印象に残ったのは「医療者も苦しんでいる」という豊田さんの言葉である。深い苦しみのなかからあのような境地に至るまでをお察しすると心が痛む。

お話を聞き、介護過誤について考えた。

私は20年余り高齢者介護の現場にいた。介護現場でも過誤は多く起きていると思っている。

しかし、介護過誤は医療過誤ほど多く表面に出ることはなく、事実が伝えられないままに終結することも多いのではないだろうか。「浴室での溺死事故」「転倒・転落」「窒息」そして「虐待」等々の報道は氷山の一角に過ぎないのではないかと思う。

介護現場の事故があまり表面に出てこないのは利用者側の理由として、未だ高齢者の施設は利用者側が選択できるほどの数はないこと、家族と当の本人が施設と「ことを起こしたくない」という複雑な感情があると思われること、家族の立場として親よりは自分の配偶者や子供のことが優先されること、などが考えられる。

一方、施設側の問題として、社会的役割を担う施設としての責任感や倫理観の欠如があげられる。高品質のより良い支援を提供して利用者に幸せを提供するという本来の目的よりは、介護者視点で「雑でも効率の良い介護をこなしていくこと」が良しとされる環境があるのは否めない。いい加減な対応でも早く業務を終えられる人が優秀な介護者とされる環境が多くの介護現場の現状なのではあるまいか。

介護職員の多くは、利用者のために一生懸命頑張っている。しかし、疲弊している。苦しんでいる。利用者が重度化し、全介助の方が増えた。やるべきことが多くてあっという間に一日が終わる。利用者とはゆっくり話ができない、一人ひとりの利用者とは話をして思いを聴き、その思いを叶えてあげたい。多くの介護職員はそう思っている。

利用者と一緒に自分も笑顔でいたい、そう思って介護の職に就いたはずなのに、と。

にもかかわらず、介護職員不足の中で、自分の行為が虐待に当たるということが理解できない介護職員を何人も見てきた。危険予知ができない職員も見てきた。介護福祉士の資格をもっている、である。

忙しい中で介護過誤が起きる。たとえいい加減な介護者であっても仲間を責めることができない。施設の不適切な対応を目の当たりにする。介護現場は、自分たちで業務改革するとか、解決方法を探るとか、カンファレンスを開くとか、自らの技術が未熟であるとか、知識が不足しているとかを考える余裕すら、失いかけているのかもしれない。介護職員も苦しんでいる。

介護職員には「倫理観」や「仕事に対するプライド」をもっと持ってほしいと願っている。介護の質が問われているが、それは介護職員、教育現場だけの問題ではない。介護現場の教育も不足しているのだ。教育現場、介護現場の教育者の質の問題もあるのかもしれない。

医療の現場も介護の現場ももっとオープンにならなければならないのだろう。医療職、介護職が患者、利用者、家族と一緒に「生きる」こと、「生活する」ことを考え、利用者がよりよい選択ができる環境を作らなければならない。みんなが同じ気持ちで同じ方向を向いていれば、過誤が起きることはゼロにはできなくても、少なくなるはずである。不幸にも事故が起きたら、その事実我真摯に向き合う姿勢が持てる。それには、学校教育と現場での教育と介護者としての豊かな経験が不可欠だと考える。